モンゴル民間治療のスンス・ドーダホ儀礼について

朝克（チョコ）

はじめに

モンゴルでは、伝統的に、人間の「スンス（sünesü）」（これは日本語の魂とほぼ同義であるため、以下魂と記す）の存在を信じ、これを行動性があり、何らかの原因で肉体を離れ、浮遊するものであると考えてきた。そして、例えば、外部から何か強いショックを受けるなどして、正気を失ったり、普段のような元気がなくなったりした場合、また、精神的なダメージから立ち直れなくなった場合などに、その原因を肉体から魂の離脱によると判断し、魂をもとの肉体に呼び戻す、いわゆる「招魂」の儀礼を行う。本研究では、魂が離脱したと判断された人を病人、魂を呼び戻す儀礼を行う人を治療者とそれぞれ記述した。

筆者の調査によると、この儀礼は、モンゴル全域にわたって広範に存在し、地域によって「スンス・ドーダホ（sünesü daγudaqu）」あるいは、「サヒォス・ドーダホ（sakiγusu daγudaqu）」（「魂を呼ぶ」の意）などと呼ばれている。本研究ではより一般的な名称である「スンス・ドーダホ」をこの儀礼の名称として使用する。モンゴルにおいては、「魂を呼ぶ儀礼」の類は、死者の魂を呼び戻す際にも行われているが、本研究で扱う「招魂」の儀礼＝スンス・ドーダホ儀礼は、生きた人間の魂を肉体に呼び戻す儀礼を指す。

本稿で取り上げる種類のスンス・ドーダホ儀礼について、それのみを主題とした研究は、管見の限り見出せないが、モンゴル人研究者たちによる言及は、決して少なくない。

マンドホ[1]は、スンス・ドーダホ儀礼の起源や種類を紹介し、同儀礼に利用する祭文のテキストを幾つか紹介している。フレルシャー[2]はシャマンによる治療方法の一つとしてスンス・ドーダホ儀礼を宗教学的立場から紹介した。包龍[3]はモンゴル人のスンス・ドーダホ儀礼のジャンルについて述べ、病状により儀礼を行う人が異なることを紹介した。ニマ[4]はモンゴル人にとってスンスは、神聖的な存在だったことを紹介した。ワ・サインチョクト[5]はハルハ、青海、ブリヤート、ホルチン、オンノードなど地域にもスンス・ドーダホ儀礼が

---

1 Manduqu, *Mongγol kelen-ü Jangsil-un sudulul*, Ündüsüten-ü Keblel-ün Qoriy-a, 2006, pp.441-446.

2 Kürelša, Baicüiying, Način, Buyančuγla, *Qorčin böge mörgül-ün sudulul*, Ündüsüten-ü Keblel-ün Qoriy-a, 1998.

3 包龍「古のモンゴル的宇宙観と霊魂観」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第24号、2007年。

4 Nim-a, *Sünesü, ongγod, sitülge*, Öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1999.

5 Vasayinčoγtu, *Ami- yin sitülge*, dooratu, Öbör Mongγol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 1998.

あることを紹介し、同儀礼はモンゴル地域に存在する文化的かつ宗教的な存在であったことを指摘した。ハスバートル[6]は、魂が肉体から離れる原因は恐怖であると指摘し、スンス・ドーダホ儀礼がシャマン、僧侶、年配者、両親によって行われると指摘した。サランゴワ[7]はホルチンの人々の間には墓を守る、世を彷徨う、転生するという3つのスンスがあるとの考えが存在することを紹介し、主に、死亡後のスンスの活動について詳細に紹介した。以上の研究では仏教やシャマニズムとの関連も指摘されてきた。しかし、諸研究者の研究目的は異なっていたため、スンス・ドーダホ儀礼については詳細に研究されてこなかった。

スンス・ドーダホ儀礼は、モンゴル地域全体に広く普及しており、少なくとも筆者の知る限り、東部モンゴルにおいては、およそ知らない人はいないといえる儀礼である。調査を通して、スンス・ドーダホ儀礼は、いまだにモンゴル人の生活の中に根強く息づき、彼らの生活や習慣をつかさどる極めて重要な儀礼であることが分かったが、つぶさな現地調査に基づく実証的な研究は行われてこなかった。

本稿[8]ではこのスンス・ドーダホ儀礼について、現在のモンゴル人社会において、人々が何らかの病になった場合に、何を理由としてその治療方法として同儀礼を選択するのか、具体的にその儀礼はどのように執り行われるのか、また、その形式的ヴァリエーション、役割を、現地調査での聞き取り調査によって得た知見より明らかにすることを目的とする。

スンス・ドーダホ儀礼についての現地調査

2013年8月20日から2ヵ月にわたって、通遼市フレー・ホショー[9]においてアンケート、およびインタビュー調査を行った。

---

[6] Qasbaγatur, *Sünesü kiged tegün-ü soyol-un qobisul*, Öbör Mongγol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 2006.

[7] サランゴワ「内モンゴル・ホルチン地方の霊魂観と悪霊について」『神奈川大学比較民俗学研究』第26号、2011年。

[8] なお、本稿での用語に関して次のような基準に従った。スンス・ドーダホ儀礼中の祭文のテキストなどの記述は筆者によるものである。モンゴル語の参考文献はローマ字転写を使用した。モンゴル語のカタカナ表示は口語の発音に従った。

[9] 調査対象地域であるフレー・ホショーは、内モンゴル通遼市の西南部に位置し、内モンゴルではモンゴル人のわりあいがもっとも多いホショー（旗）である。この地域では、ほとんどのモンゴル人が半農半牧で生活しているが、モンゴルの伝統的な習慣が多く残されている地域であり、特に精神世界――仏教、シャマニズムや民間宗教など――の面で、古い時代のモンゴル的要素が残存している。スンス・ドーダホ儀礼はそのひとつであり、フレー・ホショー全域にみられる。

1. 調査の内容

(1) 調査の目的

内モンゴルの多元的医療体系において、民間治療行為は人々の健康観念に深い関わりがある。こういった治療文化については、これまで、仏教やシャマニズム、それに伝統医療史的な視点をとり入れた研究が数多くおこなわれてきた。ところが、こうした研究の中に、スンス・ドーダホ儀礼と民俗医療の関連性を考察した例は見られない。

本研究の具体的な対象は、先にすでに述べたように物理的、あるいは精神的、心理的な強いショックをうけることによって、「魂を落とし、心身不調になった」と判断される人に対して行われるスンスン・ドーダホ儀礼による、治療過程である。筆者は、現代医学が盛んである現在、スンス・ドーダホ儀礼がどのような形でどのように行われ、どのような役割を果たしているかについて明らかにするために、現地の人々に調査を行った。

(2) 調査実施地

中国内モンゴル自治区通遼市フレー・ホショー

マンハン・ソム、エレセン・ソム、ハルゴ・ソム

(3) 調査期間

2013年8月 20 日－10月20日

(4) 調査の具体的な実施内容

人物アンケート、人物インタビュー、資料調査などを通じておこなわれた。

2. スンス・ドーダホ儀礼について意識調査（アンケート調査）

(1) 作業内容

筆者はまず、スンス・ドーダホ儀礼について、基本的な情報収集をアンケート調査形式で行った。質問項目は、この儀礼を知っているか、どういう病状に対して誰がどのように治療するかなどについての8項目（附録1）について「はい（○）、いいえ（分からない（空欄）」で答えてもらった。また、それらに加えて、それぞれの質問事項に関して自由に意見を述べてもらい、それを記録した。

(2) 調査期間

アンケートを行った期間は2013年8月20日から約2ヶ月にわたり、筆者の親戚や友人、現地の人々の協力を得てフレー・ホショー全体で1,000人以上に対して行った。

(3) スンス・ドーダホ儀礼の認知状況

聞き取り調査によると、同儀礼を知らない人はほとんどいない。また、この儀礼のやり方や役割についてほとんどの人が承知していることが明らかになった。

（4）アンケート調査の内容

アンケート調査で得られたすべての結果にかんしては、いまだに整理中であるため本稿では2013年8月25日-28日の間フレー・ホショーのマンハン・ソムのイララト村で30人に対して行った調査結果を、モデルとして以下に示す。なお、このアンケートの対象者には、この儀礼の「専門家」とも呼べるような、詳しく儀礼を知る人たちが含まれていた。

アンケート対象者（年代性別）に①同儀礼を知っているか否か、②治療者は、母あるいは祖母、③子供に対して行う、④大人に対して行う、⑤病気が回復したあるいは治った、⑥儀礼に参加した経験がある、⑦治療した経験がある、⑧儀礼を受けて治ったことがあるなど8つの質問項目によって調査を行った。附録1の通りである。

以上の結果から見るとまず、スンス・ドーダホ儀礼を知らない人はいないというこの村では、母親、あるいは祖母が治療者にあたると言い、ほとんどの人が儀礼に参加したことがあるという。その内、2人が、母親あるいは祖母が治療を行う儀礼の他にシャマンによるスンス・ドーダホ儀礼に参加したことがあり、人が僧侶による同儀礼に参加したことがあるという。そして、ほとんどの人がスンス・ドーダホ儀礼によって病気が回復してり完治する可能性が高いとみている。

この結果からみると、スンス・ドーダホ儀礼で治療を受けるのは大人より子供のほうが多いということが言えそうである。一方で約半数は大人も治療を受けるケースがあることを知っていると答えている。同儀礼を行う現場に参加したという回答も多くの人から得られたが、治療者になった経験があると言う人は総数の3分の1であった。また、この中には、男性もみられた。

治療を受けた経験のある人は総数の約半分であった。その中でシャマンや僧侶に頼んでスンス・ドーダホ儀礼治療を受けたケースもあったが、殆どの人は母親か祖母の同儀礼治療を受けたと回答した。

3. スンス・ドーダホ儀礼に対する現地の人々の認識（聞き取り調査）

インタビュー調査では主に、スンス・ドーダホ儀礼の形式、行う理由、病人とその症状、治療者、儀礼の伝承経路などについて把握することを目的として行った。このほかに、人々が民間治療を受けようとする理由について調べた。具体的には、フレー・ホショーでは精神的な病気になると精神障害者とその家族が近代的な精神医療ではなく民間治療、つまり、シャマンや僧侶による治療または、スンス・ドーダホ儀礼などを選択することが多いのだが、その理由について聞き取り調査をおこなった。

(1) 調査期間

2013年9月2日 - 20日

(2) 研究実施地域

内モンゴル通遼市フレー・ホショーのマンハン・ソム、エレスン・ソム、ハルゴ・ソム

アンケートと平行して、フレー・ホショーにおいてスンス・ドーダホ儀礼について詳しいということでよく知られている10人に対して、同様のアンケートを行いつつ、さらに踏みこんだインタビューを行った。インタビュー内容は表1、インタビュー対象の10人は表2のとおりである。

表1

	インタビュー項目
1	儀礼を行う理由は何ですか
2	儀礼を誰が行いますか？
3	どういった人に行いか？
4	どういう方法で行いますか？
5	何を準備しますか？
6	結果はどうなりましたか？
7	儀礼の際の禁止する事は何ですか？
8	老若男女で儀礼上区別がありますか？
9	行う時間、期間および回数について
10	普通の病気と離魂による病気を区別する見方
11	どうやって病気が治ったと判断しますか？
12	同儀礼のやり方を誰に教わったのですか？

表2

	性別	年齢	職業	住所（ソム）
1	女性	78	牧民	ハルゴ
2	女性	84	牧民	エレス
3	女性	49	農業牧畜兼業	ハルゴ
4	男性	54	公務員	エレス
5	男性	85	牧民	マンハン
6	女性	82	牧民	マンハン
7	女性	42	看護婦	マンハン
8	男性	40	教師	ハルゴ
9	女性	44	会社員	エレス
10	男性	72	医師	マンハン

彼らから、一般の人々が各自で治療する場合と、それ以外に、シャマンや僧侶が行うスンス・ドーダホ儀礼について、また、民間療法を選択する理由など多くのことを聞き取ることができた。

以下に、シャマンによるスンス・ドーダホ儀礼、僧侶によるスンス・ドーダホ儀礼、一般家庭で行われるスンス・ドーダホ儀礼のそれぞれについて、その行われる理由、およびは形式などについてまとめる。

3. 1. スンス・ドーダホ儀礼の行われる理由

インタビューによれば、スンス・ドーダホ儀礼が行われるのは大きく分けて2つの理由があるようだ。1つ目は「病気」を治療するため、2つ目はショック症状を治療するためであった。

(1)「病気」を治療するため

病気を患った人すべてにスンス・ドーダホ儀礼が行われるのではない。

病院に行って治療を受けても病気が治らない場合、その家族から、あるいは自分で自発的に魂に問題があると判断した人が、スンス・ドーダホ儀礼を行うかどうかを決める。その際、自発的な場合よりも、家族の判断による場合のほうが多い。

(2)「ショック症状」を治療するため

人が、いつもと異なる行動をする、うわごとを言う、もの忘れがひどくなる、独りで不思議な行動をとる、など「症状」が見られた場合、魂に問題があると判断され、スンス・ドーダホ儀礼が行われることがある。その際、家族や知人が発見することが多く、子供の場合は、その家族や保護者に助言して治すように勧める。大人の場合は、自発的に自分が異常であることに気づいて、家族などにスンス・ドーダホ儀礼を行ってもらいたいと言う場合もある。

こうした「症状」に陥るのは、現地ではショックを受けたことによるケースが多い。ここでいうショックとは表3に挙げるものであるようだ。

なお、本稿では煩雑になるため、上述したような様々な理由でスンス・ドーダホ儀礼を受ける人を以下、「病人」の語で一括して記述する。

表3

	ショックの原因	備考
1	いじめられておちこむ	子供が多い
2	人間関係、問題	大人
3	恐怖を体験する	昼夜の区別がない
4	喧嘩や口論で 精神的打撃を受ける	子供の例が多い
5	嫌忌	けがをした動物や 死体などをみて
6	夜間で道に迷う	墓地などに着く
7	失敗により 精神的打撃を受ける	恋愛や進学など
8	乗り物から落ちる	落馬など

3. 2. 期間および時間帯

フレー・ホショーのスンス・ドーダホ儀礼は3日間で行われるのが一般的であるが、1週間や、3週間行われることもある。或いは病状によっては、何か月かごとに1回行われることもある。

儀礼を行うのは夜になって動物や人々の行動がなくなり静かになった時間帯、もしくは早朝か、正午前後の静かな時間帯である。地域によってやり方は異なるが、基本的なことはあまり変わらないようである。静かな時間帯に儀礼が行われるのは、魂は静かになると行ったり来たりすると考えられているためである。儀礼の手順は地域によって、あるいは儀礼に使用する道具によって異なる。

3. 3. 治療者及び伝承経路

治療者について、一般的には、両親がスンス・ドーダホ儀礼をすることが多い。特に母親

がスンス・ドーダホ儀礼をするとのことあった。両親がいない場合は親戚の年寄り（出来れば女性）や僧侶、およびシャマンに依頼する。調査によると、儀礼のやり方は両親や親戚、村の年長者に教わった人が多かったが、中には、シャマンや僧侶に教わったという者も少数いた。

3.4. 人々が民間治療を選択する理由

インタビューによれば、ホルチン地域では、精神的な病気は民間治療によって回復および完治する比率が高いという考えが人々に定着しているようである。民間療法を受けるのと同時に、西洋医学的な医療機関等にも同時に通院しているケースもあるようだ。

例えば、精神的な障害を持つ患者とその家族が、近代的な医療ではなく民間治療を選択する理由は以下のようであるという。

(1) 交通の面

近代的医療を受けられる病院は、遠くて行き着くまでの道が悪い。公共交通機関を使用すると費用がかかるし、馬車で行くと時間かかり、悪天候の日は病状を悪化させる可能性がある。

(2) サービスの面

病院は受診者の数も多く、すぐに受診出来ない場合が多い。また、早く診てもらうためには、医師に対する贈りものが必要である、と考える者もいる。入院しても条件の悪い病室に入れられる場合がある。病院の質、サービスが極めて良くない、という回答も得られた。例えば、食事には栄養が足りず、自分で買い足すか家族の差し入れで補うことがあるともいう。

(3) コスト面

民間治療、例えば、スンス・ドーダホ儀礼を受ける場合、母親が行うのであれば金銭はほとんど必要ない。僧侶やシャマンに頼む場合でも、その人の支払えるだけの金額や品物でよい。

(4) 家族の役割についての伝統的な考え

ホルチン地域、少なくともフレー・ホショーでは誰かが精神的な病気になると、両親やその家族が病人を看病し、回復させ、事故を予防するといったように、在宅で看護すべきであるという考えが人々間に根強く存在する。魂が抜かれたと判断された者に対して薬物

による治療は効果がなく、必ず魂を呼び戻さなければならないと考えられている。

4. シャマンによるスンス・ドーダホ儀礼

シャマンが行う場合は、病人の必要に応じて、病人の家などで神霊と交流できる能力を使い、病人に神霊との交流機会を与え、或いは神霊の指示を伝えることにより、病人の「病」などを治すのだという。

シャマンがスンス・ドーダホ儀礼を行う際にシャマンの種類によってやり方が異なるようである。以下ライチン（laičing）のスンス・ドーダホ儀礼を行う方法を述べる（これはフレー・ホショーのマンハン・ソムにいたマダイ（Madai）というライチンのスンス・ドーダホ儀礼のやり方である。）。

人が異常な行動をとったり、うわごとを言ったり、ものごとを忘れたりする時に、その人が薬を飲んでも治らず、むしろ病状が重くなれば“病人”と判断され、シャマンに診てもらう。そして、シャマンは、病人の魂に問題があり、魂が消えたと判断し、魂を呼び戻す必要があると言い、儀礼を行う日にちを伝える。儀礼が行われる時間は昼間である。シャマンによる儀礼は一般的には1回のみ行う。儀礼を行う場所は病人の家やシャマンの家である。

まず、シャマンが霊的なものと直接接触･交流し、オンゴッド[10]（ongγod）を呼ぶ。そして、霊的なものであるオンゴッドがシャマンに憑依すると、シャマンはトランス状態に陥るのだという。その状態で、シャマンは病人の魂を呼び「サイック[11]（sayiγ）」と呼ばれる護符を与える。病人の家族の人がライチンの教えに従い、ドム[12]（dom）をする。最後に、シャマンはオンゴッドを返すのだという。

儀礼の具体的な手順を、以下に時間経過とともに追ってみよう。

シャマンが顔を洗い、歯を磨く。

儀礼用の服に着替える。

袈裟（čamča）を着てその上に紫色の帯を締める。

---

[10] 信仰物、偶像、祖霊を意味するシャマニズム的用語である。

[11] ホルチン地域のモンゴル語の sayig は呪文付けの護符のことをさしており、便りのような大小不等の紙や布の上にチベット語や中国語、およびモンゴル語で経文を書いたものである。あるいは、シャマンがまさに仏教の開眼供養をするように呪文をつけた布切れをさす。そのサイックを燃やした灰は、酒や牛乳、砂糖などを「em-ün kölüg（補助薬）」として一緒に飲む。「サイックは体に憑いた悪霊を追い出すか、鎮圧する機能を持っている」とホルチンのモンゴル人はよくいうのである。

[12] ドムとはモンゴルに古くから伝わるまじないや呪文を使って心身不調症を象徴的に癒す民間療法を指す。

足に布制のブーツ（γutul）を穿く。赤い袈裟（qormoyibči）を締める。
道具の準備をする。道具の中で、銅鑼（čang）、線香、中に白い米を入れた碗と中に水を入れた碗をテーブルの上に置く。テーブルをオンドルの上に置く。
神に線香などを立てて、香を焚く（sang talbiqu）あるいは酒を燃やして神に拝む。
その後、オンゴッド（ongγod）を呼ぶ。
オンゴッド（ongγod）がシャマンに憑依し、シャマンが踊る。
踊り終わるとテーブルのところに座る。この時シャマンがトランス状態になっている。
シャマンが皆に対して挨拶をする。そして、病人の年齢などを聞き、魂を落とした原因を探し、伝える。
その後、病人の魂を呼ぶために以下のような祭文を唱える。

yaγaraju bayiγad unaγsan uu dusuγsan uu
imaγ-a qoni-ban kögegejü bayiγad ayuγsan uu sočiγsan uu
yaγun-aca ayuγsan bolbaču ür-e mini ir-e ir-e
ildü jidatai böge čini daγudaju bayin-a
qurui qurui qurui
abu mömö čini ger-tegen bayin-a ir-e ir-e
aq-a degüü nerčini ger-tegen bayin-a ir-e ir-e
aγ-a-in boobu čini toγuγan-daγan bayin-a
angγ-a ür-e mini qamiγ-a bayibuču ir-e ir-e
qurui qurui qurui

【大意】
慌てていて転んだりしたの？
羊の世話に行って怖い思いをしたの？
何に脅かされたとしても我が子よ 帰っておいで。
刀や槍を持っているシャマンが呼んでいます。
ホロイ[13]　ホロイ　ホロイ
父さん母さんもお家にいます　帰っておいで
兄さんも弟たちもお家にいます　帰っておいで
アーギン・ボーブも鍋にあります

[13] 呼び戻すために使う決まり言葉で、帰っておいでという意味をもつ。

我が子よどこにいても　帰っておいで
ホロイ　ホロイ　ホロイ

その後、サイグを与える。
ライチンの教えに従い、家族の人がドムをする。ドムにはすぐにやるものと後で補助してやるものがある。最後にオンゴッド（ongγod）を戻す。これによって儀礼が終了する。

5. 僧侶によるスンス・ドーダホ儀礼

調査現地によると人々は僧侶による儀礼の効果はシャマンによる儀礼の効果とほぼ同様であると考えている。単純に、儀式を希望するものの身近にシャマンがいるか、僧侶がいるかによってどちらかが選ばれる。また、診てもらう側の個人あるいは家族が、どちらをより強く信仰しているかにもよるようである。

僧侶はシャマンと同様、病人の魂に問題があり、魂が消えたと判断し、魂を呼び戻す必要があるといい、儀礼を行う日にちを伝える。儀礼が行われる時間は午前中であるという。儀礼を行う日までに病人の好きな、美味しい食べ物を準備することが、家族に求められる。儀礼の当日に家族皆が朝早く起きて準備する。家族はその後、テーブルに病人の好きなご馳走を並べて、僧侶をもてなす。

僧侶がスンス・ドーダホ儀礼を行う方法には、聞き取りによれば2つのパターンがあるようであった。以下に、パターン①とパターン②の手順を時間経過に沿って記述する。

パターン①

僧侶が献香をしたあと、トルマ（baling）[14]を作り、神に供えて、経を読み始める。

病人は晴れ着を着て部屋にいて、度々来て僧侶を奉拝し祝福を受ける（adis abun-a）。

僧侶が太鼓や銅鑼を叩き、経を読んでいる最中に病人の母親（道具は僧侶の指示によって異なる）が僧侶の指示に従い、家の外から南→西→北→東という方向に回って、以下の言葉を唱えて病人の魂を呼ぶ。

「a ○○nasi ir-e	あー○○よ　帰っておいで
ger mal čini ende bayin-a	家の家畜はここにいます
ger büli čini ende bayin-a	家族もここにいます
tabun qosiγu mal čini daγudaju bayin-a	タワン・ホショー・マル[15]が呼んでいます

[14] 神に供えるために粉で人間や動物の形を真似て作ったお菓子のような供え物。
[15] 牛、馬、羊、山羊、ラクダを合わせて5種の家畜（タワン・ホショー・マル）という。

tal-a siγ ger čini daγudaju bayin-a　　草原のような広いお家が呼んでいます
ir-e ir-e　　帰っておいで」

この後、病人が魂を落とした原因について僧侶が必ず何か一言いう。そして、僧侶がサイック、薬などを与える。その後、親戚や親しい村の人々を招いてご馳走する。

パターン②

僧侶が献香をして、トルマ（baling）を作って神に供えて経を読み始める。

病人は晴れ着を着て家にいて、度々来て僧侶に拝んで祝福を受ける（adis abun-a.）、僧侶が太鼓や銅鑼を叩き経を読む。僧侶が経を読み終えると、テーブルの上からお菓子（ナツメなど）から一個取って病人に食べさせる。その後、魂を落とした原因を伝えて、サイックなどを与える。その後、親戚や同村の親しい人々をもてなす。

6. 一般家庭で行われるスンス・ドーダホ儀礼の形態

調査によると、スンス・ドーダホ儀礼は正式な規則、準備や順番などがあり、必ず魂を呼び戻すという目的に到達しなければならない。スンス・ドーダホ儀礼は開始と終了が明確にあり、途中でやめてはいけない。また、非常時には行わない。治療者は誰でもいいわけではない、シャマン、僧侶、お年寄り、母親などが行う。不適切な者が儀礼を行うと、魂が戻ってこないのだという。

以下、インタビューによって明らかになった、一般家庭におけるスンス・ドーダホ儀礼を行う際の注意事項とその方法を述べる。

6. 1. スンス・ドーダホ儀礼の行われる注意事項及び方法

病人の家の近所で人が亡くなってから3週間（あるいは49日）経っていなければ母親によるスンス・ドーダホ儀礼を行ってはいけないという。

また、儀礼中に治療者は訪問者や通行人、家族を含めた人たちに声をかけてはいけない。もし治療者がやむを得ず、他人に声をかけなければいけない事態が起こった場合は、スンス・ドーダホ儀礼をやり直さなければならない。しかし、他人が治療者に声をかけても応じなかった場合、そのスンス・ドーダホ儀礼は有効であり、やり直す必要はないと判断される。一般的には、スンス・ドーダホ儀礼を行う前に、治療者が家族全員にスンス・ドーダホ儀礼を行うことを知らせ、家族全員がそれに従う。スンス・ドーダホ儀礼が終わってから3日間は家で口論や喧嘩をしてはいけない、と言われている。家や庭などを清潔に保ち、かつ静かであるようにする。病人は大きな道を横切ってはいけない。

6. 2. 一般家庭で行われるスンス・ドーダホ儀礼

一般家庭におけるスンス・ドーダホ儀礼の方法には、儀礼を行う時間と道具が異なる2つのパターンがあるようだ。

以下、その手順を、時間経過に沿って詳述する。

パターン①

夜間、静かになったと判断された時間に儀礼は始められる。

スンス･ドーダホ儀礼を受けるものはオンドル（qanju）の上に横になって治療者を待つ。

治療者がスンス・ドーダホ儀礼を受けるものの服を右腕に掛けて家の外に出て、南→西→北→東という方向に回って（治療者が母親である場合は）「我が娘（或いは我が息子）よ、帰っておいでmini okin ir-e, ir-e, ir-e」などと呼ぶ。

そのあと、後ろ向きに歩いて家に入って行き、部屋に入ってスンス・ドーダホ儀礼を受ける者のところに近寄りながら、「○○（病人の名前）、帰って来たか（irebe üü）」と3回たずねる。

病人（子供）は、たずねられる度に「私は帰って来ました（bi irejei）」と答える。

その後、使った上着を儀礼病人の枕の隣に丁寧に置き、これをもってスンス・ドーダホ儀礼が終了とする。

パターン②

正午前後の静かな時間になると家や庭などを掃除し、整理整頓をして、家の中でテーブルに美味しい食べ物をたくさん並べ、病人である子供に綺麗な服を着せ、中央に座らせてから、家族皆が周りに座る。

子供の母親が井戸に行って「ドゥージン・オス（degüjing usu）」[16]を汲んで来る。

その後、傷のない清めた碗に7割ぐらいのドゥージン・オスを入れて横回りに回しながら南→西→北→東という方向に回って、「我が娘（或いは我が息子）よ、帰っておいでmini okin ir-e, ir-e, ir-e」などと呼ぶ。

そのあと、後ろ向きに歩いて家に入ってきて、部屋に入りスンス・ドーダホ儀礼を受ける者に近寄りながら「○○（病人の名前）、帰って来たか？ irebe üü?」と3回尋ねる。病

[16] サランゴワ氏によると「ドゥージン･オス（degüjing usu）」とは井戸や蛇口から容器を手に持ったまま水を受け、それをそのまま飲むか、鍋に入れて沸かして飲むことである。重要なことは、目的のところまで地面におかないことである。いわゆる初水であり、このような水は聖なる水とみなされる。聞き取り調査によると筆者の故郷（フレー・ホショー）ではドゥージン・オスを汲むのは必ず朝の静かな時である。

人は聞かれる度に「私が来た」と答える。

子供の周りにいた家族皆も（○○は帰って来ました）と答える。最後にその使ったドゥージン・オスを病人に少し飲ませる。

この儀礼が3日間続けて行われる。その病人に3日の間、晴れ着服を着せて、お美味しい食べ物を食べさせる。また、必要に応じて医者に診てもらい、薬を飲ませたりすることもある。そして、早く気になるように病人の世話をよく見る。

以上が、フレー・ホショーでかなり普及したスンス・ドーダホ儀礼の形式である。

終わりに

スンス・ドーダホ儀礼は正式な規則、準備や順番などがあり、必ず魂を呼び戻す目的に到達しなければならない。この儀礼の行われる理由は2つあり、1つ目は病気を治療するためで、2つ目はショックを治すためであった。

フレー・ホショーのスンス・ドーダホ儀礼は3日間あるいは一週間、3週間といった期間で行われる。3日間行われるのが一般的である。病状により、何か月かごとに一回行われることもある。夜になって動物や人々の行動がなくなり静かになった時か、朝早くあるいは正午の静かな時にスンス・ドーダホ儀礼が行われる。フレー・ホショーでは母親が同儀礼をすることが多い。両親がいない場合は親戚の年寄り（出来れば女性であること）や僧侶、およびシャマンに依頼する。調査によると、当儀礼のやり方は多くは両親や親戚、村の年配者に教わったという。その中には小人数はシャマンや僧侶に教わったという。

スンス・ドーダホ儀礼をおこなう注意事項および方法としては、病人の家の近い所で人が亡くなって3週間経っていなければスンス・ドーダホ儀礼は行わない。儀礼を行う場合、儀礼中に治療者が訪問者、通行人や家族を含めた人たちに声をかけてはいけない。一般的にはスンス・ドーダホ儀礼を行う前に治療者が家族皆にスンス・ドーダホ儀礼を行うことを知らせ、家族皆がそれに従う。スンス・ドーダホ儀礼が終ってから3日間過ぎるまで家で口論や喧嘩をしてはいけない。家や庭などを綺麗にかつ静かであるようにする。病人は大きな道を渡ってはいけない。

フレー・ホショーでは、家で母親がスンス・ドーダホ儀礼を行う時間は正午あるいは夜である。同儀礼を行う方法としては2つのパターンがある。また、シャマンや僧侶によるスンス・ドーダホ儀礼もある。同儀礼は霊魂信仰を活用する治療方法と言える。心理的状況をよりよい状態にととのえることで、肉体の調整をはかる。霊的な側面での治療である。

今後はスンス・ドーダホ儀礼に関して他のモンゴル地域との比較研究を行い、同儀礼を行う方法が昔から今までにどのように伝わってきたかについて注目したい。

附録1.

	性別	年代	知っているか否か	治療者は母・祖母	子供に対して行う	大人に対して行う	病気が治った	儀礼に参加した	治療した経験ある	儀礼を受け治った
1	女	80	○	○	○	○	○	○	○	○
2	女	80	○	○	○	○	○	○	○	
3	女	50	○	○	○	○	○	○	○	
4	女	20	○	○	○		○	○	○	
5	女	30	○	○	○		○	○	○	
6	男	8	○	○			○	○		○
7	男	7	○	○			○	○		○
8	女	40	○	○	○	○	○	○		○
9	女	40	○	○	○	○	○	○	○	
10	男	20	○	○	○	○	○	○		
11	男	30	○	○	○	○	○			
12	男	30	○	○	○	○	○	○		
13	男	80	○	○	○	○	○	○	○	○
14	女	80	○	○	○	○	○	○	○	○
15	女	20	○	○	○	○	○	○		
16	男	50	○	○	○		○	○		○
17	女	50	○	○	○		○	○	○	
18	男	40	○	○	○	○	○	○		○
19	男	30	○	○	○	○	○	○		
20	男	40	○	○	○	○	○	○		○
21	女	10	○	○	○		○			
22	女	10	○	○	○		○	○		○
23	男	20	○	○	○	○	○	○		○
24	女	20	○	○	○		○	○		○
25	男	10	○	○	○		○	○		○
26	女	10	○	○	○		○			
27	男	30	○	○	○		○	○		
28	女	20	○	○	○		○	○	○	
29	男	70	○	○	○	○	○	○	○	
30	女	70	○	○	○	○	○	○	○	○